

Eureka XI

六年制通信 No.6 令和5年5月19日(金)号

二極化が進む気がする

少子化、あるいは少子高齢化社会という単語を毎日のように耳にするようになってもう何年になるでしょうね。警鐘いまだ鳴りやまずといった状況です。このままいくと人口の半分は65歳以上の高齢者（今は65歳でもお元気ですけどね）になるとか。大変な問題です。しかし聞くとところによると、明治の初めころ日本の人口は約三千万人でしたが、その半世紀後には八千万人に増えたらしいですよ。50年で二倍以上にもなるのですから、今からでも大丈夫ですよ、きっと。でも、考えてみると社会における結婚の制度も家族というものの考え方も当時とは全く違いますから、現在が少子化という大変な問題に直面しているとしても、それは私たちが選択した結果に他ならないわけです。明治6年生まれの子孫（この字で「えつこ」と読みます）が書いた『武士の娘』（ちくま文庫）を読んでみると、彼女の生きた当時の結婚観や家に対する考え方がよくわかります。なるほどこれでは社会が少子高齢化するわけがないと思うことでしょう。ただ、君たちは大きな違和感を覚えるでしょうね。結婚相手を親が決めるのですから。しかし現代人の目で昔を批判するのは簡単ですが、前にも言ったようにそれは無知な人間のすることですから、慎みましょうね。余談ですがこの本は杉本さんが英語で書き、アメリカで出版したのですよ。外国に向けて日本を紹介するのに英文を用いることができたのは新渡戸稲造や内村鑑三、あるいは岡倉天心だけではないでした。杉本さん、次の次くらいに五千円札の肖像になったりして。

さて、子どもの数が減っているわけですから、当然大学の数も減っているのかと思いきや、これが増えているのですね。進学する人の割合が増えているのですからある程度はわかるのですが、進学したい人は必ずどこかの大学には行けますよ、選ばなければね、などと聞くと何だか不思議な気がします。実際に少し数字を見てみましょうか。平成10年のあたりで四年制大学へ進学するのは35%くらいだったはずですが、今では53%以上が進学をします。これをもって国民の教育程度は上がったと考えていいのかどうか、どうも怪しい気がしますけどどうしてでしょうかね。四年制大学の募集定員と志願者数の関係を見ると2024年、つまり来年ですが、大学の全募集定員が約64万人に対し志願者が約62万人となり、リアル全入時代の到来というわけですね。しつこいですが大学を選ばなければね。これ、しかし、ちょっと笑えないくらい怖い話だと思いませんか。今、日本には理論上、誰もが入学できるくらいの数の大学があるわけですが、果たして本当に必要なのか、はなはだ疑問ですね、私は。もちろん理由は簡単ですべての大学が質の高い教授陣を持てるはずがないからです。

昔と今の18歳人口を比較すると、例えば私が18歳の時（昭和53年）で158万人（ちなみに平成4年は多くて205万人）、令和5年は112万人です。46万人の減少です（ちなみに全国で最も人口の少ない県は鳥取県で、およそ53万人、これに近い数字が減ったわけです）。46万人が減ったということは1クラスを40人として11500クラス分がなくなったということです。三重中高の生徒がざっと2000人弱ですから、この規模の学校が全国で約230校消えた計算です。ちょっと怖くなってきますよね。

大学の数を比較すると、昭和53年で433校、昨年度の統計で807校。文科省が発表している2021年度の統計を詳しく紹介すると、四年制大学が803校、うち国立大学86校、公立大学98校、私立大学619校です。短期大学は、国立0、公立14校、私立が301校です。さらに高等専門学校57校、専修学校専門課程が2754。以上、高校3年生にとってこれだけの進学先があるということです。

では全入時代を迎えるとどうなるか。想像するに、勉強しないと入学できない大学とそれ以外の大学にはっきり二極化していく気がします。いわゆる高校までに身につけるべき「学力」のレベルを、大学教育を受ける知的担保と考えるかどうか、その線を守る大学とそれ以外の要素で入学試験を行う大学に分かれるのではないか。最近の文科省は従来型の学力よりも探究活動に重きを置く傾向があるので、大学によっては入試が探究活動の成果発表会みたいになるかもしれませんが、学力を測定する大学がなくなるとは思えません。諸君はそういう大学を目指すべきでしょうね。

今週のおすすめ

・池井戸潤 『果つる底なき』（講談社文庫）

江戸川乱歩賞受賞作です。池井戸さんの原作はよくドラマになっています。有名なのは「半沢直樹」シリーズでしょうか。私は読んででもないし観てもいませんが「倍返し」でしたっけ、流行語になったのは。「下町ロケット」は全部読んだしドラマも全部観ました。これは面白かったですね。「ノーサイドゲーム」も原作を読みドラマも観ました。ちょうどあの頃からラグビーブームが起きましたからタイムリーなドラマでしたね。大泉洋さんの主演でこれも面白かったな。他にも「空飛ぶタイヤ」とか「アキラとあきら」とか、ほんとにたくさんドラマ化されていますね。

池井戸さんは元銀行員。でしょうね、詳しくすぎますよ、描写が。今回の本は推理小説ですから結構殺人事件が起こりますが、動機として現実にあるのか、ちょっと設定に無理があるようにも思います。読んでみて、皆さんで判断を。また、この作品が書かれたのは二十年以上も前のこと。パソコンの苦手な上司であるとか、現在では肩身の狭い喫煙者が泣いて喜びそうな場面とか、時代の良くわかる描写、ひょっとしたら解説がないと君たちには何のことかわからない描写があるかもしれません。昔に出版された本には古き良き時代がそこにあるので、それも楽しいですね。

私は経済の話がそもそも苦手なので、何が書いてあるのかわからないことも多かったのですが、謎解き自体は楽しめました。恋愛を絡める必要はなかったと思いますが。

BGMは 尾崎亜美 の マイ・ピュア・レディ でした…。